

公開シンポジウム

# 文化財をまもる

## みんぞく資料をまもる

### 開催趣旨

近年の世界的なグローバル化は、

国内外を問わず文化の画一化を進め、

地域もしくは民族のもつ固有の生活文化の背景を失わせる要因になっている。

わが国においては、一般社会のなかで自らの生活文化について

意識する機会が少なかったこともあり、

その基層となるみんぞく資料は、

文化財として、それほど注目されてこなかった。

本シンポジウムでは、

博物館や地域活動のなかでおこなわれているみんぞく資料の保護事例を紹介し、

新たな保護のありかたを追究することを目的とする。

シンポジウムは、専門家による講演とパネルディスカッションで構成する。

基調講演では、わが国におけるみんぞく資料の実情を概観する。

講演では、みんぞく資料を対象とした資料管理の実例、

地域のなかでの保存と活用、被災民俗文化財の保存修復事例を取り上げる。

パネルディスカッションでは、みんぞく資料の保存の将来像について議論を深めたい。

平成22年 9月 11日(土) 13:00～16:40

国立民族学博物館 講堂

(大阪府吹田市千里万博公園 10-1)

主催◎文化財保存修復学会

共催◎国立民族学博物館

協力◎(独)国立文化財機構

後援◎文化庁・吹田市・日本文化財科学会

日本博物館協会・全日本博物館学会

日本民具学会・近畿民具学会・読売新聞社

NPO 文化財保存支援機構・NPO 文化財夢工房

総合司会 日高 真吾 (国立民族学博物館)

13:00～13:10 **開会あいさつ**  
三輪 嘉六 (文化財保存修復学会理事長)

**セッション1 基調講演** 座長◎本田 光子 (九州国立博物館)

13:10～13:40 **民俗文化財をまもる**  
三輪 嘉六 (九州国立博物館館長)

**セッション2 国立民族学博物館における資料管理の事例**  
座長◎本田 光子 (九州国立博物館)

13:40～14:00 **国立民族学博物館における資料管理の30年**  
森田 恒之 (国立民族学博物館名誉教授)

14:00～14:20 **国立民族学博物館における  
資料管理の現状と今後の展望**  
園田 直子 (国立民族学博物館教授)

**セッション3 地域博物館とみんぞく資料**  
座長◎日高 真吾 (国立民族学博物館)

14:30～14:50 **枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館における  
鉄製民俗資料の保存活動**  
武知 邦博 (枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館学芸員)

14:50～15:10 **地域が守るみんぞく資料**  
伊達 仁美 (京都造形芸術大学教授)

15:10～15:30 **災害とみんぞく資料**  
内田 俊秀 (京都造形芸術大学教授)

**セッション4 パネルディスカッション**

コーディネーター  
村上 隆 (京都国立博物館保存修理指導室長)

15:45～16:25 **みんぞく資料をまもるために**  
パネリスト  
三輪 嘉六・園田 直子・武知 邦博・伊達 仁美・内田 俊秀

16:25～16:40 **総括と閉会挨拶**  
三輪 嘉六 (文化財保存修復学会理事長)

## 民俗文化財をまもる

九州国立博物館 三輪 嘉六

「みんぞく」には「民俗」と「民族」の両方がありますが、ここでは民俗を取り上げます。民俗の用語は広く使われ、また一般的な呼称でしたが、これが「民俗文化財」となると比較的新しい表現といえます。文化財保護法でもこの制度が改正された昭和50年までは「民俗資料」と呼ばれていた経緯があります。従来、これを山村漁村の生活用具、生活用具等を中心とした有形のものを考えてきたわけで、今日の制度下ではもっと幅広く「国民の生活の推移の理解のために欠くことのできないもの」として、有形のほかに無形である風俗習慣、民俗芸能までを保護の対象にしております。

いずれにしても、民俗文化財のもつ基本は、有形文化財の規定のように歴史上又は芸術上価値の高いことを求めておりません。強いて言えば、市民生活の中で受け継がれ、保持されていくことが求められる性格の文化財のはずです。しかし、それを取り巻く今の現状を考えると、多くの場合、有形ではものそれ自体を保存し継承していくことに本質を求めるよりも、そのものを正しくつくり、表現していく技術や手法に民俗文化財保護の一つの本質を求めざるを得ない環境にあると思われます。こんな現状を考えたとき、「製作技術」を継いでいくことに向けての保存対策に大きく目を向けていくことが大事ではないでしょうか。丁度、有形文化財の継承について修理が不可欠であることを背景とし、その修理に関わる保存技術が制度的に新たに設定されたことが参考になります。

また、これまで民俗文化財の基本施策の一つとして取り組んできたものに、無形の民俗に対する記録保存があります。民俗資料は主に日常の実際生活には深く根ざしたところに特性があり、またその実用性を視野に入れることが大事な側面になっています。しかし、生活様式の変化は全面的に価値を失い、また時として無駄なものとして捨てられてしまう事さえあり得ます。記録保存はそんな事情を背景に、昭和29年11月に選択された正月行事、中馬制、蔓橋の製作工程などを皮切りに記録作成等の措置を講ずべく選択された無形の民俗資料として今日に至るまで展開しているわけです。このあり方について、撮影方法や今日的な新しい映像技術など新しいありようを検討していかなければならない時期にきているのではないかと思います。また、博物館、資料館等の文化財公開施設における新しい活用のあり方を探る必要もあります。民俗文化財に対する保存への関心の道を拓くためにもと、考えています。



みんぞく資料の修復



みんぞく資料製作の  
動画撮影

## 国立民族学博物館における資料管理の30年

国立民族学博物館 森田 恒之



「みんぞく」資料は、人間の一生に関わるさまざまなモノである。「みんぱく」では、開館以来、これを「標本資料」と呼んできた。命名者は初代館長の梅棹忠夫氏である。みんぞく資料の特性を見事に言い当てた表現だと思う。統計学では、「標本」を「ある特定の属性を持つ集団から選び出された構成因子の一部」と定義する。自然史諸学でもこれに近い定義がある。みんぞく学資料は資料ではあるが、同時に標本である。収集した固体そのものより、それが属する母集団により高い意味や価値がある。博物館法第2条で「保管（育成を含む）」とあるのは自然資料では「個体の保存より種の保存」を重視するからだ。美術資料や歴史資料がそれぞれの美的、学術的な価値を重視するのに対して、みんぞく資料は主たる保存の目的が違うといってよい。個体の保存は必要だが、個体の特徴にこだわって母集団の特性を殺してはいけないのだ。私がこのことを意識し始めてから、それぞれの資料に生じる変化に注目するとともに、母集団の持つ物質としての特性をあきらかにすることにかなりの時間を費やした。と同時に、世界各地でそれぞれ異なる生活環境から切り離して、博物館という特殊空間に隔離するための環境順化をもう一つの軸に置いた。30年前、資料保存に標本、母集団、平準化といった発想を導入すること自体が挑戦だったが、いまでは自然史や近代化遺産などの保存領域でも無視できなくなっている。



国立民族学博物館の収蔵庫：資料の材質、形状は種類は多彩を極める

## 枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館における鉄製民俗資料の保存活動

枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館 武知 邦博



枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館は、枚方で鋳物業を長きにわたり営んできた田中家の鋳物工場と主屋からなる地域資料館である。工場には田中家の鋳造用具を中心に鋳造関連資料を、主屋には枚方市域の民具を展示しており、また、これらの資料を保存している。当館の特徴として、鉄製の鋳物製品・用具を多く収蔵しているが、これら資料の錆による劣化を防ぐために、椿油の塗布による防錆を実施している。

この方法は、京都造形芸術大学の伊達仁美先生、国立民族学博物館の日高真吾先生の指導を得て行っているもので、概略を述べると、ブラシ等で鉄製資料に付着した汚れと、簡単に剥落する状態の錆を落とし、その後に椿油を刷毛などで塗布する。不乾性油である椿油が、鉄の表面を大気中の酸素より遮断し、錆の進行を止めるという方法である。

当館では、主に資料館のアルバイトスタッフがこれを実施している。私もこのスタッフも保存科学の専門教育を受けたわけではないが、椿油が人体に無害であることと、また可逆性があり資料に対しても安全性が高いということが、これを可能にしている。

博物館の活動は、資料の収集・展示・保存が大きな柱であるが、ほとんどの地域資料館には、文化財の保存科学を専門とする職員まで配備されているわけではない。また、専門業者に依頼できるほどの潤沢な予算が無い場合も多い。

しかしながら、このように専門家でなくとも実施可能な保存技術が、研究者により開発されつつあり、当館のような小さな地域資料館でもそれが可能になっている。



鋳鉄製の羽釜に防錆のために椿油を塗る。ブラシでクリーニングした後に、椿油を刷毛で塗っている

## 国立民族学博物館における資料管理の現状と今後の展望

国立民族学博物館 園田 直子



国立民族学博物館（以下、民博）では、2004年の法人化を機に、文化資源研究センターが設置された。センターで運営する文化資源プロジェクトのひとつに「有形文化資源の保存管理システム構築」があり、計画を毎年度見直ししながら、資料の保存管理を、館として総合的かつ長期的視点で進めている。

民博における資料管理の課題は、虫害対策と収蔵環境改善に集約できる。虫害対策としては、持続的なIPM（総合的有害生物管理）体制を予防保存の見地から確立することを目指している。また対処療法として、薬剤を用いない殺虫処理法の開発・改良に取り組んでいる。環境整備においては、博物館環境に関わるデータを簡便かつ効率的に分析するシステムとして、生物生息調査分析システムに続き、温度・湿度分析システムを開発中である。さらには収蔵環境改善を目的に、資料の材質や形態に応じた保管・収納法の開発、および使用する材料の選択条件に関する調査研究に着手している。

今後の展望としては、博物館においても、環境問題への配慮がますます問われることに留意したい。オゾン層破壊物質として臭化メチルが全廃したことが、IPMが日本の博物館で積極的に導入される契機となったのは周知のとおりである。近年の地球温暖化の問題を受け、二酸化炭素の排出削減の流れのなか、博物館でも、年間の温湿度の変動幅の許容範囲を広げることで、節約をめざす流れになることは予測できる。今までの経験をもとに、どの程度の変動で事故に結びついたのか、あるいはどの程度の変動までは寛容できるのかを見定め、予防保存の体制をとっていかなければならない。

民博における資料管理は着実に整備されつつあるが、現状で確立したものとは考えておらず、今後ともさらなる改良、改善に取り組んでいく。



## 地域が守るみんぞく資料

京都造形芸術大学 伊達 仁美



昨今の市町村合併にともない、各地で博物館や歴史民俗資料館の統廃合が行なわれている中、地域の特徴が稀薄となることが懸念されます。民具・民俗資料・民俗文化財という、いわゆる生活資料を「地域の文化遺産」として捉え、それを伝えるための活動2例を紹介します。

1例目は、最小の地域である「小学校の校区」単位で行なう資料保存です。学校教育の中でモノを通じて社会の移り変わりや歴史などを理解し、地域の一員として地域の人たちとともに学ぶことができる拠点として「明德 小さな博物館」(京都市立明德小学校)を整備し公開しました。公開するにあたり、資料のクリーニング、展示棚の設置、展示替え、収蔵方法の改善、資料台帳作りなどの整備を行ないました。

作成した台帳には使用方法や履歴、寸法などを記入していますが、これは完成したものではなく、地域の方々によって完成していただくよう情報を随時書き込めるように台帳の側に筆記用具を配置しました。

公開日当日には多くの地域住民が訪れ、実際に使用したことがある年代の方々は、資料を手にとられて思い出話を語り合うとともに、若い世代や小学生に対して道具の使い方などを解説されていました。

2例目は、地域住民のボランティアによる資料保存です。地域の資料は日々そこで暮らしているの方々には、日常生活の延長として経験と知恵があり、資料を扱う際の何気ない会話が資料の情報として付加されていきます。

「向日市文化資料館」(京都府向日市)のボランティア組織では、館蔵資料を扱うグループである資料整理・展示班が資料保存に携わっています。1999年の発足から10年が過ぎ、活動歴が10年を超えた人も多く、館蔵資料だけではなく地域の中でも資料調査やその保存へと活動の幅が広がってきています。

ボランティアの皆さんは、毎月行なわれる専門家による勉強会に参加し、資料保存のみならず様々なことを学習し、地域資料を守り伝えるための活動に生かされています。



新収蔵資料の水車のクリーニングをボランティアの皆さんで行なっている(向日市文化資料館)

## 災害とみんぞく資料

京都造形芸術大学 内田 俊秀



1995年の阪神・淡路大震災以降、私は大きな自然災害で被災した文化財の救出や修復に関わっている。気候の変化もあり、水害は毎年起こり、地震も発生回数が増加している。被災地を訪れるたびに救出を待つ多くの文化財を目のあたりにするが、その中でもとりわけ量と種類、嵩が大きいのが民俗資料だ。幸運にも史料ネットなどの団体が古文書と一緒に発見し救出する場合もあるが、このようなケースは少ない。反対に、所有者にとって最近まで使用していた農具類などは、価値に気づかれないまま、あるいは価値の検討が第三者によってなされぬまま廃棄されてしまう。

指定文化財・未指定品という分類方法を取れば、未指定品であっても指定品と同程度の価値を有するものが眠っており、これらの救出作業は、指定文化財から未指定品へと広がっている文化遺産の広い裾野を扱う、非常に重要な作業といえる。

しかし幾つかの問題も指摘できる。その一つが、救出時などに発生する保管スペースの問題だ。一時保管の場所を探しても、数の多さや嵩の大きさが原因して、適当な場所が見つからない。解決策として、廃校となった小学校の教室、博物館の会議室などが臨時に使用された例もある。そして一時保管の期間が過ぎても所有者が引き取れなくなるケースも発生している。収蔵されていた土蔵などが取り壊され、行き場を失ったためだ。地元の郷土資料館などでは、既に類似の収蔵品がある場合、収蔵スペースの関係で、寄託を受けたくても引き取れない場合もあり問題は深刻だ。他方、救出され資料館に展示されることで、地元の小学生の社会科の授業に使用され、価値を発揮している例もある。

## セッション4 パネルディスカッション

## みんぞく資料をまもるために

コーディネーター 京都国立博物館 村上 隆



### 講演者紹介

三輪 嘉六(みわ かるく)  
九州国立博物館長

日本大学史学科卒業。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁主任文化財調査官、東京国立文化財研究所修復技術部長、文化庁美術工芸課長、同庁文化財鑑査官、日本大学教授を経て、1998年より九州国立博物館設立準備室室長、2005年より現職。  
各地で文化財の保存・活用についての各種委員を務める。99年から文化財保存修復学会会長に就任。専門は考古学、博物、文化財学。  
著書に『日本馬具大観Ⅰ～Ⅳ巻』(編著、吉川弘文館)、「家形はにわ」(『日本の美術』至文堂)、「美術工芸品をまもる修理と保存科学」(『文化財を語る科学の眼5』国土社)、「Horses in Ancient Times」(『Horses and Humanity in Japan』The Japan Association for International Horse Racing)、「文化遺産危機管理的基本課題」(『1999台湾集々大地震-古蹟文物震災修復技術諮詢服務報告書-』台湾国立文化資産保存研究中心)など多数。

森田 恒之(もりた つねゆき)  
国立民族学博物館名誉教授、愛知県立芸術大学客員教授  
1961年東京藝術大学美術学部芸術学科卒業、63年同学美術専攻科(保存修復技術専攻)修了。万国博美術館、埼玉県立博物館、東京都美術館を経て、79年より国立民族学博物館、2002年同定年退職後、国際協力機構専門員を経て08年より愛知県立芸術大学客員教授。  
専門は、保存環境。最近では現代美術の保存技術開発に関心がある。

園田 直子(そのだ なおこ)  
国立民族学博物館文化資源研究センター教授

1980年 Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) : Licence ès lettres (Histoire de l'art)、82年 Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) : Maîtrise des Sciences et Techniques (Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques)、83年 Ecole du Louvre, le titre d'Ancien Elève、87年 Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) , Doctorat de 3ème cycle (Histoire de l'art)。87年 フランス Laboratoire de recherche des musées de France、89年 Service de restauration des peintures des musées nationaux、91年 国立歴史民俗博物館助手、93年 国立民族学博物館助手、99年より総合研究大学院大学文化科学研究科併任。専門は保存科学。10年文化財保存修復学会第4回業績賞受賞。  
著書に、『紙と本の保存科学』園田直子編、(岩田書院、2009)、『博物館への挑戦-何がどこまでできたのか』日高真吾・園田直子編、(三好企画、2008)、『国立民族学博物館調

査報告53 国立民族学博物館国際シンポジウム「紙の若返りを考える」園田直子編、(国立民族学博物館、2004)、『国立民族学博物館調査報告36 合成素材と博物館資料』園田直子編、(国立民族学博物館、2003)がある。

武知 邦博(たけち くにひろ)  
枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館学芸員  
(財団法人枚方市文化財研究調査会職員として)

1995年追手門学院大学文学部東洋文化学科卒業、99年帝塚山大学大学院人文科学研究科日本伝統文化専攻修士課程修了。財団法人遺芳文化財団日本はきもの博物館学芸員を経て、2007年より現職。  
専門は民俗学、特に民具学。現在は民俗的な薬の利用に興味をもつ。  
著書に、「スリッパ」『かわとはきもの No.126』(東京都立皮革技術センター台東支所、平成15年)、『日本履物新聞』に読む戦後の履物』『日本はきもの博物館・日本郷土玩具博物館2004年度年報』(平成17年)がある。

伊達 仁美(だて ひとみ)  
京都造形芸術大学芸術学部歴史遺産学科教授

1979年帝塚山大学教養学部日本文化専攻卒業。財団法人元興寺文化財研究所伝世品保存修復室室長を経て、2002年より現職。  
日本民具学会理事および評議員、近畿民具学会常任幹事、徳島県、京都市、東大阪市の文化財保護審議会委員のほか、各地の博物館等の委員を務める。  
専門は、民俗文化財の保存修復。現在は、民俗資料を地域の歴史遺産と捉え、地域で守る活動を行なっている。  
著書に、「マダガスカルで博物館を整備する」『博物館への挑戦-何がどこまでできたのか』(三好企画、2008)、「菓子製造用具の保存修復について」『和菓子』15号(虎屋文庫、2008)がある。

内田 俊秀(うちだ としひで)  
京都造形芸術大学芸術学部教授

1971年明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業、76年「文化財保存修復国際センター」(在ローマ、ICCROM) 科学理論課程修了、78年国立ローマ中央修復研究所修了(日伊政府交換留学生として)。  
79年(財)元興寺文化財研究所・保存科学研究室研究員(平成2年7月迄)、90年京都芸術短期大学助教授を経て、現在にいたる。  
専門は文化財保存、特に青銅製品。現在は文化財防災に興味をもつ。  
著書に、『私たちの文化財を救え』(クバプロ、2007、共著)、『銅産業』『日本産業技術史事典』(思文閣出版、2007、共著)がある。



村上 隆 (むらかみ りゅう)

京都国立博物館学芸部保存修理指導室室長

1953年京都生まれ。京都大学工学部、同大学院工学研究科修了。東京藝術大学大学院美術研究科修了。学術博士。文化財保存修復学会理事。日本文化財科学会評議員。石見銀山資料館名誉館長。岡山大学客員教授(自然科学研究科)、立命館大学特別招聘教授(グローバル・イノベー

ション研究機構)、佐賀大学特命教授(地域学歴史文化研究センター)。

著書に、『金・銀・銅の日本史』(岩波書店、2007)、『日本の美術 443号 金工技術』(至文堂、2003)、『色彩から歴史を読む』(ダイヤモンド社、1999)、『文化財は守れるのか』(編、クパプロ、1999)ほか。

専門は、歴史材料科学、材料技術史、博物館学。

第8回ロレアル国際賞「色の科学と芸術賞金賞」、第1回「石見銀山文化賞」。第4回文化財保存修復学会業績賞。

## 文化財保存修復学会の沿革

文化財保存修復学会(旧・古文化財科学研究会)の活動は、昭和8年に滝精一博士の提唱によって発足した「古美術保存協議会」に始まります。戦後にいたって、「古文化財之科学」(柴田雄次編集)を創刊し、昭和50年には会の名称を「古文化財科学研究会」と改め、文化財に関する幅広い研究活動を続けてきました。しかも近年、文化財の科学的研究が盛んになるにしたがい、この分野における草分けともいべき本会に課せられた責任は、ますます重みを加えつつあります。そうした要求に対応するため、本会は平成7年に「文化財保存修復学会」として新たなスタートを切りました。

本会の特長として、物理、化学、生物など自然科学諸分野の専門研究者はもちろん、考古学・建築史学・美術史学など人文科学部門の研究者、文化財保存関係機関の専門家・技術者・博物館や美術館の学芸員、その他文化財の科学研究に関心をもつ多くの分野の方に参加いただいています。

(「入会のしおり」より)

### ◎文化財保存修復学会の連絡先

〒110-0008 東京都台東区池之端4-14-8  
ビューハイツ池之端102号室  
NPO法人文化財保存支援機構気付  
Tel: 03-6661-2982 Fax: 03-6661-2983  
E-mail: jsccp@sepia.ocn.ne.jp

文化財保存修復学会公開シンポジウム実行委員会  
委員長 ● 三輪 嘉六  
副委員長 ● 村上 隆  
委員 ● 本田 光子・園田 直子・伊達 仁美  
日高 真吾・岡 泰央

## 文化財の保存と修復シリーズ刊行のお知らせ

### 文化財の保存と修復⑫

#### 文化財のまもり手を育てる

一般社団法人文化財保存修復学会編/B5版変型/108頁  
ISBN 978-4-87805-111-1 C1070/定価:本体価格1,400円+税  
平成22年7月30日初版発行

※本書は平成22年1月に開催されたシンポジウム「文化財をまもる 文化財のまもり手を育てる」の講演収録集です。

#### セッションⅠ 基調講演

1. 人材養成にはたす博物館の役割  
九州国立博物館長 三輪 嘉六
2. 文化財保存教育40年 将来に向けて  
国士舘大学21世紀アジア学部教授 沢田 正昭

#### セッションⅡ 学校教育

1. 日本における学校教育の現状と課題  
東京学芸大学教育学部教授 二宮 修治
2. 西欧における文化財保存のための高等教育  
東北芸術工科大学教授 藤原 徹

#### セッションⅢ 社会教育

1. 東京国立博物館におけるインターン制度  
インターンシップの未来  
東京国立博物館学芸研究部保存修復課長 神庭 信幸
2. 伝統技術の継承と人材養成  
国宝修理装演師連盟理事長 岡 岩太郎

#### セッションⅣ パネルディスカッション

文化財のまもり手を育てるために

コーディネーター 西浦 忠輝

<問い合わせ先>

(株)クパプロ

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-11-15  
UEDAビル6F

Tel: 03-3238-1689 Fax: 03-3238-1837

E-mail: symposium@kuba.jp